

機動戦士
ガンダムユニオン
MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN

プロローグ
—Prologue—

著 福井晴敏

キャラクターデザイン・挿絵 安彦良和

メカニックデザイン カトキハジメ

原案 矢立肇・富野由悠季

*内容の転載・再配布は固くお断りいたします。

©創通エージェンシー・サンライズ

角川書店「月刊ガンダムエース」2007年2月号より

おお これは現実には存在しない獣だ。
人々はそれを知らなかったのに 確かにこの獣を
——その歩くさまや たたずまい そのうなじを
またその静かなまなざしの光に至るまで——愛していたのだ。

なるほどこれは存在していなかった だが
人々がこれを受愛したことから生まれてきたのだ。
一頭の純粋な獣が。人々はいつとも空間をあけておいた。
するとその澄明な 取って置かれた空間の中で
その獣は軽やかに頭をもたげ もうほとんど

存在する必要もなかった。人々はそれを穀物ではなく
いつもただ存在の可能性だけで養っていた。
そしてその可能性がこの獣に力を与え

その額から角が生えたのだ。一本の角が。
そして獣はひとりの少女に白い姿で近寄り——
銀の鏡の中と 彼女の中に存在し続けた。

L・M・リルケ『オルフォイスへのソネット』第一部4

(…：現在、グリニッジ標準時二十時零分を回りました。みなさん、記念すべき大晦日ニューイヤーズ・イブの夜をいかがお過ごしでしょうか？ いま、ひとつの世界が終わり、新しい世界が生まれようとしています。

人類史上、もつとも有名な人物の生誕とともに始まった世界。信仰の有無うむに関わりなく、多くの人にキリストキリストの世紀と呼ばれてきた世界は、あと四時間足らずで終わりを迎えます。原始の闇から二本の足で立ち上がった以来、大海を渡り、空を飛ぶことを覚え、宇宙の高みに昇る技術を手に入れてきた人類は、いまや母なる地球の外に自らの世界を築く時代に足を踏み入れました。フロンティアの時代、新世界の扉がすべての人類の前に開かれたのです！

かつて、我々の祖先が新天地を求め、大陸に渡り、文明の灯を地上にあまねく押し広げたように、この広大な宇宙に文明の灯をともし役割が我々に与えられたのです。これから宇宙に上がる人々は、もはや専門職を身につけた飛行士や技術者に限りません。宇宙に住み、宇宙に根づき、宇宙の常闇とこやみに文明の灯をともし開拓者たち。スペースノイドと呼ぶべき、選ばれた宇宙市民たちなのです。

新しい世界には、新しい暦こよみが必要です。四時間後、グリニッジ標準時午前零時零分より、地球連邦政府主催の改暦セレモニーが始まります。人類史に永遠に刻まれるであろうセレモニーの舞台は、首相官邸「ラプラス」。地球と宇宙のかけ橋となるべく、地球軌道上に設けられた「空飛ぶ」官邸です。宇宙時代の幕開けを告げるのに、これ以上の適地はないでしょう。

報道陣が見守る中、連邦構成国の代表たちも「ラプラス」に参集し、いまや全世界が午前零時の時報を待つております。ニューイヤーズ・イブであると同時に、ニューワールド・イブでもある今宵こよい、思いは人の数だけあることでしょう。新たな時代への期待と不安、二千年以上の時を紡いだ旧世紀への惜別……。しかし、私たちは今夜、ひとりの例外もなく歴史の目撃者となるのです。長い人類の歴史において、いまこの瞬間を生きる私たちだけが、新しい世界の幕開けを目の当たりにできるのです。この幸運を分かち合い、去りゆく旧世界を感謝とともに送り出そうではありませんか。そして、訪れる新しい世界を笑顔で迎え入れましょう。

グッバイ、西暦A D。ハロー、宇宙世紀U C——！！

地球は、足もとにあつた。

赤茶けた陸地と、雲を散らした青空のように見える海。高度二百キロメートルから見下ろすそれは、惑星というより地表だった。大気の外にいますという実感はなく、高空を飛ぶ飛行機から地表を見下ろしている程度の感覚しかない。じっと見ていると、このまま地上

に降りられるのではないかと思えてしまふ。

それでも、眼下の地表は刻々と表情を変え、自分が大気中では考えられない速さ——九十分で地球を一周する——で移動していることを教えてくれる。少し前方に視界を移せば緩やかな弧に薄い大気のベールをまとった惑星の輪郭を確かめることもできる。その向こうに広がるのは、強すぎる地球光に星の輝きを拭き取られた虚空の常闇。漆黑というだけではまだ足りない、いつさいの光を吸い尽くして広がる無辺の闇だ。

おれは宇宙にいらしい。ふと実感し、サイアムは背中に嫌な汗が滲むのを感じた。作業艇の小さな窓から飽きるほど見た眺めだが、こうして宇宙服ひとつで船外活動に出、ヘルメットのバイザー越しに見た印象はまるで異なる。視界を遮るものがないからか、地球の外を浮いている我が身が否応なく実感されるのだ。

大気と重力から切り離され、地球の外を回り続ける浮遊感……それは恐ろしい感覚だった。血が、骨が、細胞が、未知の異常を訴えて発熱しているのがわかる。そうして結露した汗が冷たい悪寒になり、無重力にさらされた喉元に畏怖の塊がこみ上げてくる。

サイアムは、前方に広がる虚空を見据えた。すべての星がかき消された闇の中、ただひとつ鋭く輝く光の塊が見えた。いまにも爆発しそうな白熱光を放つ太陽——いや、それは実際に爆発し続ける炉心で、その輻射熱は真空では摂氏百二十度に達し、いまも宇宙服の表面を炙っている。大気の底から見上げると違い、純粹なエネルギー体として白色に輝く太陽は、やはり畏怖しかもたらさないなかだった。バイザーのフィルターが光量を調節してくれていても、その突き刺さるような光の暴威が和らぐことはない。

こんなところにいたら気が狂う。ここは人間の来る場所ではない、とサイアムは思った。はるかな昔、いまから思えば無謀としか言いようのない性急さで大気圏外に飛び出した宇宙飛行士たちは、いずれも地球の青さに感銘を受け、価値観が覆る経験をしたそうだが、せいづらは選び抜かれたエリートたちだ。最高の教育を受け、人類の前衛たる誇りを抱くエリートたちだったのだ。ろくに読み書きもできない自分とは違う。自分のような人間が宇宙に上がったって、得るものはない。どだい、大陸の名前も位置関係も知らず、故郷の在り処さえ判然としない十七歳の若僧の目に、足もとの地球はただそこにあるバカでかい塊と映るだけだ。

フロンティア？ 冗談じゃない。ここはゴミ捨て場だ。際限なく増え、いまや地球を押し潰さんばかりになった人間を廃棄する、無辺のゴミ捨て場——。

（人類の新たな生活の場となるスペースコロニーとは、どのような世界なのでしょう？ 間もなく始まる宇宙世紀の前に、あらためて検証してみたいと思います。今日はゲストに宇宙工学の第一人者、アレクセイ・グランスキー博士を迎え……）

空々しいアナウンスの音が続いていた。それは自分の呼吸音と一緒にたになり、密閉された宇宙服の中で行き場なく滞留するようだった。サイアムは、靴底に触れている構造物を軽く蹴った。

作業艇と繋がっている命綱の張力を確かめつつ、それまで足をつけていた構造材の裏側に移動する。体が百八十度ひっくり返った格好だが、天地のない宇宙空間で気にすることではない。サイアムは、トラス状の構造材を分厚い手袋に覆われた手でつかみ、正面を見た。一面の鏡の原が、そこにあった。約三メートル四方の凹面鏡が一面に敷き詰められた、まばゆい鏡の原。

千枚にもぼる凹面鏡の群れは、全体で直径五百メートル弱の平べったい円盤を形成し、もう何年も地球の低軌道を周回し続けている。円心部に直径百メートルほどの穴があき、そこだけぼつかりと虚空の闇が覗いているさまは、遠目には大昔に使われていた光記録ディスクそっくりに見えた。靴底のマグネットを使い、円盤の縁に足を接地させたサイアムは、頭上に視線を転じた。この鏡の原とほぼ同じ直径を持つドーナツ型の構造物が視界に入り、ドーナツの穴の向こうに、鏡の原とまったく同型の円盤が一枚、地球を背景に浮かんでいる様子が確認できた。

表面の凹面鏡で太陽光を反射し、ぎらぎら光るとてもなく巨大なディスクが二枚と、それらから三百メートルほどの距離をあげ、中央に挟み込まれているドーナツがひとつ。(ラプラス)と名づけられた低軌道宇宙ステーションの、それが全体像だった。上下二枚のミラー・ブロックは常に太陽の光を反射し、正確にはスタンフォード・トラス型と呼ばれるドーナツ型の居住ブロックに光とエネルギーを供給する。居住ブロックは七十五秒周期で回転し続け、円環の内壁に遠心力による重力を生じさせる。地球の六分の一弱、月と同程度の重力しか発生させられないが、無重力の不便に比すれば上等というところらしい。直径五百メートルの円環に地球並みの重力を発生させようとするれば、回転周期は三十秒を切らねばならず、中にいる人間はめまいを起こす羽目になるのだそうだ。

そんな場所を首相官邸にする政府のお偉方は、よほどの物好きかただのバカ。その片隅でこそこそ這い回り、宇宙酔いを起こしかけているおれはもつとバカだ。こわ張った頬を無理に動かし、サイアムは苦笑を浮かべてみた。(おい、「羊飼」。勝手に持ち場を離れるな)と仲間の声が無線越しに弾ける。

「おれの分は済んだ」
(だったら船に戻ってろ。ライフサインが乱れてるぞ)

仲間のうちでは年嵩で、「親方」に次ぐリーダー格と目されている男が続ける。サイアムは無視してその場に留まり、頭上で回転する居住ブロックに目を凝らした。真空では空気による遠近差が生じないため、物の形がくつきりと見える。外縁部と内縁部に分かれた二重の円環構造物も、中央の回転軸からのびるスポーク・エレベーターも、その構造材の継ぎ目から質感まで、精緻なミニチュアを目前にしているかのような明瞭さだった。

サイアムは、採光用に内側がガラス張りになっている外縁部の円環を注視した。グリニッジ標準時に合わせ、夜の時間を迎えている居住ブロックに、ミラーの光が差し込むことはない。代わりに屋内の照明の光がガラス面から漏れ、円環の中にいる人々の息吹を見る

者に伝えていた。

いま、そこでは四時間後に迫った改暦セレモニの最終準備が進められている。二十三日四十五分から始まる首相のスピーチ、式に参列する連邦構成国代表たちへの対応、零時の時報とともに開催されるセレモニのスケジュール確認……。人類史に刻まれるイベントを前に、官邸要員たちはさぞかし多忙な時間を過ごしているだろう。サイアムたちにしても、その準備のためにここに呼ばれた身だった。セレモニの演出用に、ミラー・ブロックの制御プログラムを部分的に変更するのがその仕事の中身だ。

とはいえ、集中制御室からの一括インストールで終わりというような、スマートな仕事ではない。ミラーの裏側に何百とある個別制御盤に直接アクセスし、角度調節変更用のプログラムを流し込む肉體労働だった。全体で一枚の鏡を構成するミラー・ブロックは、任意の鏡の角度だけ変更する想定はされていなかったからだそうだが、本当にそうなのかはわからない。わかる必要もない、とサイアムは思っていた。自分たちは手足に過ぎず、頭の役割を果たす何者かは別にいる。サイアムたちに大手電機メーカーの社員証を渡し、この〈ラプラス〉に送り込んだ何者か。仕事を終えたら報酬をくれる何者か。事のすべてを企て、今頃はなに食わぬ顔で“その時”を待っている、おそらく生涯顔を合わせることもない何者か――。

ライフサインが乱れている？ 当たり前だ、とサイアムは胸中に罵った。こんな時に平静でいられる人間などいない。自分たちの行為が、目前の円環の中にいる数百人の運命を決定的に変えてしまうのだから……。

（スペースコロニーの概念そのものは、二十世紀の中頃にはすでに存在していました。物理学者のG・K・オニール博士が提唱したのですが、彼のアイデアが画期的だったのは、人間に適した住環境を宇宙空間に建設しようとしたことです。それまで、宇宙植民地と言えば、金星や火星を地球環境に改造するといったアイデアがせいぜいで、SFの世界では実現できないものでしたから。その点、「島」と呼ばれるオニールのスペースコロニーは、当時の技術でも実現が見込めるプランだったのです。建設資材を月や小惑星帯から調達するという点も含めて、今日の宇宙移民計画の基礎はオニールによって完成されたと言っても間違いではありません）

どこかの学者が喋っていた。サイアムは命綱を手繰り、ミラー・ブロックの裏面に体を流した。

（構造は極めて単純です。球形、もしくは円筒の構造物を一定間隔で回転させ、その内壁部に1G、つまり地球のそれと変わらない重力を発生させる。水の入ったバケツを勢よく振り回すと、中の水は遠心力によってこぼれませんか？ あれと同じ原理です。初期の球型タイプは「島1号」と呼ばれ、1Gを発生させるぎりぎりの大きさしかありませんでしたが、最新型の「島3号」は全長三十二キロメートル、直径六・四キロメートルという巨大な代物です。この巨大な円筒の内壁に森や川、街など、地球そっくりの住環境が構

築され、宇宙移民者はそこで暮らすことになるのです。

多くの鏡の裏がそうであるように、ミラー・ブロックの裏側も無愛想な板面だ。表面の凹面鏡に沿って無数の支持材が錯綜し、その交点に制御盤が設置されている。サイアムが裏側に戻った時、その制御盤のいくつかには仲間が取りつき、手持ちの端末から変更プログラムをインストールしているところだった。

鏡の原とは打って変わった闇の中、そこそこに突き出した注意灯が赤く点滅し、五人ほど残った仲間たちの宇宙服を陰鬱いんうつに浮かび上がらせている。彼らの頭上には、個々の宇宙服からのびる命綱を束ね、黙然もくぜんと静止する作業艇が一隻。全長二十メートル、直径二メートルほどの細長いドラム缶型の船体に、スラスタノズルと太陽電池パネルを取りつけた作業艇の背後には、緑と白の航宙灯が無数に遊弋ゆうよくするさまも見て取れた。

連邦宇宙軍の警備艇、サラミス級だ。全長七十メートルの無骨な船体は、トラス構造の骨組み前方に操艇指揮所が張り出し、船尾には四基のロケット・エンジンを束ねていて、船体下部に全長に匹敵する大きさの太陽電池パネルを備えている。魚の骨を想起させる姿は、警備艇というには頼りなく見えたが、指揮所の下に装備された高出力レーザー砲を始め、宇宙空間では無類の戦闘力を誇るのだということは、サイアムも事前にレクチャーを受けて知っていた。

サラミス級の装備バリエーションはいくつかあり、船体中央のモジュールに戦闘機を係留するジョイント・アームを備えたもの、船体と同じ長さのレールガンを搭載したものとさまざまなが、共通装備としては遠隔操作のレーザー衛星がある。これはバッテリーと太陽電池パネル、レーザー発振器からなる小型の無人砲台で、一隻につき二十四基を搭載。必要とあらばこれらを艇の周囲に展開し、鉄壁のエリア防御力を誇る。特別警備配備中の現在、すべてのサラミス級はレーザー衛星を展開しており、〈ラプラス〉に近づく不審機はもちろん、軌道上を漂う宇宙塵スペースデブリに至るまで、レーダーに捉え次第即座げきざに撃墜する態勢が整えられているはずだった。

事前に聞いた情報では、展開中のサラミス級の数は三十六隻。レーザー衛星は八百六十四基というすさまじさだが、三次元空間全域をカバーせねばならない宇宙での警備事情を思えば、妥当な数字なのだろう。首相を始め、連邦構成国の代表たちが一堂に会した〈ラプラス〉は、いまや地球圏でもっとも重要な警備対象であり、発足間もない連邦宇宙軍はその警備に威信を賭けている。実際、どんなに狡猾なテロリストでも、外部からの攻撃は不可能だとサイアムは認めていた。

そう、外部からは――。

（無論、スペースコロニーには昼夜もあります。「島3号」タイプのコロニーには全長に匹敵する大きさのミラーが設置されていて、これが太陽光を取り入れます。この図のように、円筒の内壁部は縦に六区画に分かれており、そのうちの三区画が「河」と呼ばれる採光用の窓になっていますが、ここから差し込む光がそれぞれ三つの居住区画を照らすのです。

この「河」は分厚いガラスによって構成されており、人体に有害な紫外線や宇宙放射線を遮断する働きもあります。現在、「島3号」タイプのコロニーは三基が完成しており、すでに技術者や開拓者が家族ごと移り住んでいます。コロニー環境に起因する重大な疾病が発生したという報告は聞きません。採光レベルを調節することで四季も再現できますし、人工雲の張り方ひとつで雨も作り出せる。完全に管理されているという意味では、むしろ地球より過剰しやすい住環境だと言えます。

(だったらてめえが住みやがれ)

学者の弁に続いて、仲間の声が無線に割り込んできた。オープン回線で仲間同士の通信を確保しながら、改暦前夜祭の特別番組に聞き入っているのは誰もが同じだ。(住むだろうよ。地球の家は残して、別荘代わりにな)と別の誰かが相手をする。

(確かに宇宙は広大ですが、地球や月との相対距離を一定に保とうとすれば、どこに建設してもよいというものではありません。スペースコロニーは、ラグランジュ・ポイントと呼ばれる重力安定点に建設されています。これは地球と月の引力干渉によって生じるもので、月の軌道上に五カ所あり、それぞれL1からL5と名づけられています。先ほどお話した三基の「島3号」型コロニーは、このうちもつとも安定しているL5に置かれ、サイド1と呼ばれる集落を形成しています。現在は一千万人が居住していますが、来年からスタートする本格的な移民によって、人口はすぐに膨れ上がるでしょう。同型のコロニーは続々と建設中で、最終的には七、八十基のコロニー群がひとつのサイドを形成し、連邦を構成する自治体として機能するよう見込まれています)

(一基のコロニーに一千万人程度収容できるとして、ひとつのサイドの人口が七、八億人になります。宇宙移民計画では、最終的にいくつのサイドの建設が見込まれているのでしょうか?)

(現在の計画では、サイド6までの建設が予定されていますが、それだけでも完成までに五十年かかると言われています。全コロニーの想定収容人数は約五十億。いま現在の総人口九十億に、今後五十年間の人口増加率を掛けると、総人口の約半数が宇宙移民者になる計算になります)

誰かが口笛を鳴らし、(おい、二人にひとりだつてよ)という声が後に続いた。(おめえはハズレの方だ)と別の誰かが言う。

(ようするに、地球は定員オーバーなのよ。間引きする度胸がねえなら、余った人間は宇宙に棄てるしかねえ。おれらみたいに、ハズレの人生ひいちゃった人間をな)

さらに続いた声は、(無駄口を叩くな)と発したリーダー格の声に遮られ、段取り通りの会話を続けるアナウンサーと学者の声が後に残された。威圧するように頭上を横切ったサラミス級を見上げながら、ハズレか、とサイアムは独りごちた。

「地球を守り、人類を守る」というかけ声のもと、五十年計画でスタートした人類宇宙移民計画。実は大がかりな兼民政策であるとする話の真偽はともかく、いわゆる分離主義者、

反連邦政府組織がネットやアングラ出版物で主張している中身は常にそれだったし、もし人口の半分が強制移民をさせられる時代が来たら、サイアムたちのような“ハズレ”の人間が真っ先に宇宙に放り出されるだろうことも事実だった。実際、宇宙への進出を望む企業は多いが、実情は税金の優遇措置に魅かれてのことではなく、初期の宇宙移民者の大半は地球であぶれた者たち——低所得者層であるとの統計も、アングラ出版物では紹介されていた。

だが、そんなことは問題ではない。“組織”のお偉方は連邦政府からの分離を叫び、民族精神の発揚とナシヨナリズムの復権を謳って恥じないが、サイアムたちには馬の耳に念仏だった。連邦政府がまっとうな仕事と生活を保障してくれるなら、間違いなくそちら側につく。ボンベの化け物のような「島3号」型コロニーに移住したっていい。問題は、自分たちには最初から選択肢がなかったことだ。連邦の政策で国が分割され、仕事も住む場所も失った自分たちには、“組織”に加わる道しかなかったことが問題なのだ。

サイアムは、中近東に位置する貧しい小国で生まれた。物心がついた時、地球連邦政府はすでに発足しており、月にはフォン・ブラウンと呼ばれる資源採掘基地も完成していたが、高原地帯で昔ながらの放牧業を営むサイアムの家には無縁の話だった。月面の採掘資源を軌道上に打ち上げるマス・ドライバーが竣工したというニュースも、遠く小惑星帯アステロイドベルトに資源調査船団が出発したというニュースも、サイアムにとっては別世界の話でしかなく、特別課税が苦しい、政府は他にやることがあるはずだ、とボヤク大人たちの会話を横聞きしては、そういうものかと思うのがせいぜいだった。

そうした不平不満に対し、連邦政府は『地球はそれほど疲れている』と言い続けてきた。「緑の革命」と呼ばれる農業生産性の向上に伴い、地球の人口キャパシティが増加したのはいいが、増えた人間が引き起こす環境破壊、熱汚染は別の問題として残る。挙句、限定核戦争のような事態まで起これば、地球が早晚限界に達することは明白であり、地球連邦政府はその非常事態救済機関として設立されたのだ、と。そして、唯一無二の解決策という触れ込みで人類宇宙移民計画がスタートしたのだが、その一方、反対勢力を圧倒的な軍力で押さえ込み、疲弊した地球に紛争の種を撒いてきたのも連邦政府だった。

かつての大国を分割し、構成国の軍事的・経済的格差をなくす大鉦おとなたが振られたとはいえず、音頭を取ったのが旧大国の政財界筋となれば、連邦からの分離を訴える国家は少なくなかった。サイアムの祖国もそのひとつで、石油の枯渇で落ち目になった中東の国々と徒党を組んだのだったが、結果は無残な敗北に終わった。国土は反乱抑止の名目で二つに分割され、法律は書き換えられた。先祖伝来のしきたりは破壊され、滑らかな英語を話す者たちが多数入植してきて、学校の授業も内容が一変した。

そんな中、サイアムの父はゲリラ活動に加わり、ほどなく投獄された。寡黙で、実直だけが取り柄の男のどこに愛国の熱情が潜んでいたのか、サイアムには想像もつかなかったが、父はその疑問に答えることなく、投獄先で死亡した。母や幼い妹とともに残されたサ

イラムは、学校を辞め、放牧業を継いで家計を支えねばならなかった。“羊飼”という仇名は、その頃の経験からきている。

しかし、それも長くは続かなかった。最終段階に入った宇宙移民計画の工程表に従い、連邦政府は大量の移民打ち上げ設備を欲しており、サイアムたちが住む高原にも打ち上げ基地が建設されることになったのだ。すべては地主と移民準備局の間で進められ、サイアム一家はわずかな補償金とともに土地を追われた。空気の悪い都会のアパートに母と妹を住ませ、打ち上げ基地の建設現場で働くのがサイアムの新しい生活になった。そして三年後、六つ目の打ち上げ基地が竣工した時、次の仕事はないと人事担当に宣告された。父が分離主義者であったことが移民準備局にばれ、雇用を解消するよう言われたというのがその理由だった。

いまさら、の話ではあった。あとで聞いたところによると、連邦政府の失業対策で大量のよそ者が国内に流れ込み、分離主義運動の関係者は根こそぎ追放されているのだという。反乱分子の根絶やしと見せしめを兼ねた、実に効果的な政策と言えたが、サイアムは無駄に怒って腹を減らすことはしなかった。それより金が必要だった。都会暮らしが肌に合わず、病気がちな母を医者に通わせる金。育ち盛りの妹に継ぎのない服を買ってやる金。明日のパン、今晚のスープを賄う金が、なんとしても必要だった。

職業安定所に通いながら、日雇い仕事の幹旋場所^{あつせん}に出入りする日々が始まった。そういう場所には暴力団筋の手配師に紛れ、怪しげな地下組織のリクルーターも入り込んでいるもので、サイアムは早々に彼らのアンテナに引つかかった。父の仇を討つなどという一文にもならない理念はなく、彼らが煽り立てる義憤とやらにも興味を持たないサイアムだったが、提示された報酬には魅力を感じずにはいらなかった。迷ったのは三日ばかりに過ぎず、サイアムはイスラム教信者を装うリクルーターの誘いを受けた。そして簡単な宣誓のあと、古いモスクで仕事に必要な訓練を受け、その場で引き合された名も知らぬ仲間たちとともに宇宙に上がった。

そう、仕事だ……とサイアムは口中に呟いてみる。水冷式の下着の気持ち悪さも、アルミニウムやグラスファイバーを何層も重ねた宇宙服の閉塞感も、仕事だから耐えられる。そこに思想はない。主義もない。頭でっかちのカルトが、名誉と引き替えに自爆テロをやるとうというのとも違う。生きて仕事を成功させ、約束の報酬をもらうことがすべてだ。母と妹に人並みの生活をさせるのに、他の選択肢はなかったというだけのことだ。

そうでなければ、誰が好きこのんでこんなところに来るものか。まともな仕事さえあれば。金さえあれば。“ハズレ”の人生を引き当てさえしなければ――。

(しかし、考えてみてください。それでも地球に残る人口は五十億あまり。これは、人口爆発が懸念され始めた二十世紀末の総人口と同じ数です。地球の自然環境を回復させるには、まだまだすぎる。理想的には、地球の居住人口は二十億以下であるべきなのです。

ひとつのラグランジュ・ポイントに二つのサイドが建設できたとして、サイドの上限数

は十。百億の人間を宇宙に住まわせることも可能でしょう。ですが、すべての建設を終えるまでにあと百年かかるとしたら、その時の総人口は何人になっているのか。正確なところは誰もわかりませんし、その頃には地球環境が回復していると考えられるのも楽観的です。百年後の人類の叡知に期待するしかないというのが、偽らざる現状なのです。

宇宙移民計画に反対されている方々は、この現実をよく理解していただきたい。我々人類は、地球連邦政府という統一政権を樹立することで、この途方もないプランを実行に移すことができた。自滅の一手前で踏み留まり、百年後の未来を見据える目を持ち得たのです。宇宙移民計画は、連邦政府の棄民政策であるとする一部の論調は……)

学者の声はそこで不自然に途切れ、場違いなアイキャッチの音楽が沈黙の間を埋めた。(えー、お話の途中ではありませんが、ここで改暦カウントダウンにわく各地の中継映像が入ってきました。まずは戦災から復興したかつてのニューヨーク、現ニューヨークからの映像です)と続いたアナウンサーの声を聞きながら、サイアムは命綱を手繰って作業艇に近づいていった。

棄民政策という一語が、放送コードに引っかかったのだろう。連邦政府が民主主義を標榜する傍ら、政府直轄の情報機関がマスコミにチェックの目を光らせ、事実上の報道管制をするようになって久しい。(バカな奴)と呟いた仲間の声は、ニューヤーク市民のインタビュー音声に重なって聞こえた。

(なんで切るんだ？ 連邦万歳って話なのに)

(本音を言い過ぎたんだろ。御用学者がさ)

(百年先の未来より、てめえの明日を心配しやがれ)

下卑た笑い声が無線のスピーカーを震わせたが、長くは続かなかった。サイアムは無言のまま、虚空に浮かぶ作業艇のエアロックを目前にした。

宇宙では重さを気にする必要はないが、かと言って質量がなくなるわけではない。自分の体重に加え、背中に生命維持装置を抱えた宇宙服の重みを両腕で受け止めながら、サイアムはエアロックに取りついた。レバーに手をかけつつ、ミラー・ブロックの円盤こしに蒼く輝く地球を視野に入れる。

昼と夜の境目を浮き立たせる大気層に、赤とも緑ともつかない光の筋がたゆたっていた。オーロラだ。(ラプラス)は南極上空あたり差しかかっているらしい。幽玄な光の帯を見下ろし、なにかしら胸がざわめくのを感じたサイアムは、すぐに目を逸らしてエアロックのレバーに力をかけた。

なにも感じる必要はない。仕事を終えて帰るだけのことだ。微かに早まった呼吸の音を耳にしながら、母と妹はどうしているだろうとほんやり考えた。

(地球と宇宙に住むすべてのみなさん、こんにちは。わたしは地球連邦政府首相、リカルド・マーセナスです)

グリニッジ標準時、二十三時四十五分。定刻通り、首相のスピーチは始まった。すでに加速を終え、〈ラプラス〉の周回軌道から離脱しつつある作業艇のキャビンで、サイアムは仲間たちとともに中継映像を映す小さなモニターに見入っていた。

（間もなく西暦が終わり、我々は宇宙世紀という未知の世界に踏み出そうとしています。この記念すべき瞬間に、地球連邦政府初代首相として「みなさん」に語りかけることができる幸福に、まずは感謝を捧げたいと思います。

わたしが子供の頃、首相や大統領が語りかけるのは自国の国民と決まっていました。国家とは国民と領土の統治機構であり、究極的には自国の安全保障のためのみ存在するものでした。いま、人類の宿願であった統一政権を現実のものとした我々は、旧来の定義における国家の過ちを指摘することができます。人間がひとりでは生きていけないように、国家もそれ単独では機能し得ないことを知っています。ことに地球の危機という課題に対して、旧来の国家はなんら有効な解決策を示せませんでした。二十世紀末葉から指摘され始めた人口問題、資源の枯渇、環境破壊による熱汚染……。いまや後戻りの許されないこれらの問題を解決するには、我々ひとりひとりの意識改革が不可欠だったのです）

狭苦しいキャビンの中、壁に埋め込まれたモニターに見入る仲間たちの数は十四人。操舵室にいる二人を除けば、この仕事に関わる全員が顔をそろえたことになる。どれも宇宙には似つかわしくない面構えだ、とサイアムは思った。

褐色の肌、長年の肉体労働の刻苦を皺にして忍ばせる「親方」。リーダー格の男は鼻毛を抜き、無重量のために顔にまとわりつくそれを吹き散らしたりしている。宇宙開発初期のエリート飛行士がこの場にいたら、情けなくて涙が出る光景に違いないが、こんな連中でも宇宙に上がれるのが宇宙世紀ということなのだろう。

（一国家、一民族に帰属する「我」ではなく、人類という種に帰属する「我」。この観点に立たない限り、我々は今日という日を迎えられなかったでしょう。前身機関の設立から五十年あまり、人類宇宙移民計画とともに歩んできた地球連邦政府の歴史は、決して平坦なものではありませんでした。国家、民族、宗教……これらの壁を取り払い、人類が本当にひとつになるためには、まだまだ多くの試練を乗り越えなければならぬことも事実です。

しかしいま、我々はスペースコロニーという新しい生活の場を手に入れました。間もなく始まる宇宙世紀とともに移民も本格化し、多くの人が宇宙で暮らすことを当たり前とする時代が来るでしょう。これは人の重さに押し潰されそうな地球を救うべく、人類が一丸となったことの輝かしい成果です）

〈ラプラス〉の居住ブロックの一角、円環を形成する巨大なチューブ内にしつらえられた演壇に立ち、マーセナス首相はテレビ慣れした穏やかな顔をカメラに向けている。演壇の前方に居並ぶのは、連邦構成国の代表たち。時おり挿入される彼らの肅然とした顔をモニターに眺めながら、サイアムは自分たちの仕事もたらす経過を頭の中に思い描いた。

サイアムたちがインストールしたプログラムに従い、〈ラプラス〉のミラー・ブロックを

構成する凹面鏡は通常とは異なる動きを示す。それは午前零時の時報とともに作動し、地球の夜の面に太陽光を反射して、“Goodbye, AD Hello, UC!”の文字を大気層に描き出すはずだが――。

(西暦と呼ばれた時間が、人類が人類たるアイデンティティを確立した揺籃期とするならば、宇宙世紀はその次を目指す時間となることでしょう。我々は産児制限によって人の数を減らすのではなく、人口に見合った空間を外に開拓する道を選びました。小さくなった揺りかごから這い出した赤子は、成長をしなければなりません。我々は宇宙移民計画を実現する過程で、共通の目的のためならひとつに結束できると世界に証明しました。では、その次は？)

宇宙世紀。ユニバーサル・センチュリー。字義通りに訳せば「普遍的世紀」ということになります。宇宙時代の世紀であるなら、ユニバース・センチュリーとするべきでしたが、我々は敢えて用法違いと思われる「ユニバーサル普遍的」を選び、新しい世紀の名前としました。

実際には、午前零時を待たずにプログラムは作動している。千枚を超える凹面鏡のうち、臨時プログラムをインストールされたものは微妙に角度を変え、(ラプラス)の居住ブロックの一部に集光した太陽光を照射し始める。

(わたしはかつてのアメリカ合衆国で生まれ、ドイツで幼年期を過ごし、フランスで少年時代を過ごし、学生時代はアジアで暮らし、妻はアラブとヨーロッパのハーフです。わたしの両親も似たようなもので、祖先を振り返ると、実に三十以上の国の血が混じり合い、いまのわたしが形作られていることがわかります。あらゆる色の肌、あらゆる民族の血がわたしの中で息づいているのです。その「普遍的」な出自から、地球連邦政府初代首相の栄誉を授かることにもなったのですが、このような背景を持つ方は他にも大勢おられるでしょう。二十一世紀から本格的に始まった通信技術の発達、相互依存経済による世界の並列化が、血と肌の混合を推し進めたのです。連邦政府の樹立による国境の無力化と、世界標準語の制定によって、この傾向は今後ますます加速することとします。それはもう、なんら特殊なことではありません。

宇宙で人が暮らすということ。そのために、全人類が一丸となって移民計画を推進してきたことも、また然りです。この奇跡を、特殊な事例にしてはならない。人類はひとつになれるという事実を普遍化し、互いを拒絶することなく、憎しみ争うことなく、一個の種として広大な宇宙と向き合ってゆく。ユニバーサル・センチュリーという言葉には、そんな我々の祈りが込められています)

赤道面に対して、直角に交わる極軌道を周回しているため、(ラプラス)は地球の陰かげに入ることなく、常に太陽光を浴びる位置関係にある。角度変更した一部の凹面鏡は、間断かんたんなく太陽光を反射し、集束した光線を指定箇所に照射し続ける。

(わたしはどのような宗教にも属していませんが、無神論者ではありません。高みを目指すため、自らの戒めとするため、己の中により高次な存在を設定するのは、人の健康な精

神活動の表れと信じています。西暦の時代、それは神の言葉としてさまざまに語られてきました。人はどのように生きるべきか。いかにして世界と向き合うべきか。モーセが授かった十戒の例を持ち出すまでもなく、それらに対する教えはあらゆる宗教に伝えられています。人間の言葉ではなく、人と神の契約の説話として。

いま、神の世紀に別離を告げる我々は、契約更新の時を迎えようとしています。今度は超越者としての神ではなく、我々の内に存在する神——より高みに近づこうとする心との対話によって。宇宙世紀の契約の箱は、人類がその総意から生み出したものであるべきでしょう。

真空であるため、複数の凹面鏡による焦点熱束は理論値の絶対温度五千五百度に達し、熱線とっていい複数の光線が〈ラプラス〉の居住ブロックの一面——環境制御システムと繋がる水の循環路を灼く。無論、不可視の光線だ。白熱する照射ポイントを注視していない限り、周辺に展開するサラミス級も異変には気づかない。

（この首相官邸の名前、〈ラプラス〉の語源についてはご存じの方も多いでしょう。十八世紀のフランスに生まれた物理学者の名前です。ラプラスは、過去に起こったすべての事象を細大もろさず——原子一個の動きに至るまで——分析することで、未来は完全に予測できると考えました。この考えは、のちに量子力学の発達によって否定され、いまでは未来を完全に予測する術はないことが証明されています。我々は、その経緯を逆説として受け取り、この首相官邸に〈ラプラス〉の名を冠しました。「未来にはあらゆる可能性がある」という意味を込めてのことです。

ご承知の通り、地球軌道上のステーションに首相官邸を置くことについては、さまざまな議論がありました。交通の利便性や警備上の観点からすると、確かに望ましい選択とは言えません。しかし、我々は宇宙世紀に踏み出そうとしているのです。この宇宙こそが人類の新たな生活の場となるのです。その途上に立つ者として、地球と宇宙の狭間に身を置かねばわからぬこともあると思います、わたしは首相権限でこれを押し通しました。西暦の最後の日、改暦セレモニーとともに宇宙世紀憲章を発表するのであれば、その舞台はここに置いて他にないとも考えました。

太陽光にさらされる部分は摂氏百二十度の高熱に、陰になる部分はマイナス百二十度の酷寒にさらされる〈ラプラス〉は、居住ブロックの円環を一周する水の循環路を環境制御に用い、気温調節を行っている。虫メガネでそうするように、集束された熱線が上下のミラー・ブロックから降り注ぎ、その循環路のパイプをじりじりと灼き続ける。

（今日、ここには地球連邦政府を構成する百カ国あまりの代表が集い、吟味に吟味を重ねた宇宙世紀憲章にサインをしました。間もなく発表されるそれは、のちにラプラス憲章と呼ばれ、人と世界の新たな契約の箱として機能することになるでしょう。

地球連邦政府の総意のもと、そこに神の名はありません。人類の原罪についても言及されていません。これから先、もし最後の審判が訪れるとしたら、それは我々自身の心が招き寄せた破局となるでしょう。すべては我々が決めることなのです。

熱線がパイプ表面の金属を溶かし、循環する水を沸騰させ、膨大な量の水蒸気に変える。センサーが異変に気づいた時には、パイプは内側からの圧で破裂し、居住ブロックの気圧は瞬間的に跳ね上がり、さらには高温によって水蒸気から分離した水素ガスが――。

(いま、我々の目の前には広大無辺な宇宙があります。あらゆる可能性を秘め、絶え間なく揺れ動く未来があります。どのような経緯でその戸口に立ったにせよ、新しい世界に過去の宿業を持ち込むべきではありません。我々はスタート地点にいます。他人の書いた筋書きに惑わされることなく、内なる神の目でこれから始まる未来を見据えてください。)

現在、グリニッジ標準時二十三時五十九分。間もなくです。この放送をお聞きのみならず、もしその余裕があるなら、わたしと一緒に黙禱してください。去りゆく西暦、誰もがその一部である人類の歴史に思いを馳せ、そして祈りを捧げてください。

宇宙に出た人類の先行きが安らかであることを。宇宙世紀が実りある時代になることを。我々の中に眠る、可能性という名の神を信じて――)

五、四、三、二、一……零時零分。モニターの映像が〈ラプラス〉の遠景に切り換わる。
宇宙世紀0001、一月一日。

突然、モニターにノイズが走り、白い閃光が焼きついた。次の瞬間、〈ラプラス〉はその形を崩し、音もなく瓦解した。

精緻な幾何学的美学を誇っていた円環が無様にひしゃげ、内側から破裂し、大量の構造物や外板、ガラス片が四方に飛散してゆく。ドーナツ状の居住ブロックから噴き出したその奔流は、ドーナツの上下に展開する二枚のディスクを打ちのめし、表面の凹面鏡がごとごとく粉碎されたミラー・ブロックは、ほぼ一瞬にして銀色の輝きを失った。居住ブロックと二つのミラー・ブロックを繋ぎ止める回転軸のシャフトもねじ曲がり、ひしゃげたドーナツと薄汚れた割れ鏡が二枚、ほとんど廃墟以下の様相を呈して虚空を漂流する。飛散した破片群は周辺に展開する警備艇にも襲いかかり、直撃を受けた不運なサラミス級が爆発の光輪を咲かせる。巨大な宇宙ステーションを背景にすれば、小さな光点でしかないそれが無数に咲き乱れ、崩壊した〈ラプラス〉を献花のように埋め尽くす――。

壮絶に美しく、かつ呆気ない光景だった。真空で一気圧を保つ宇宙船やステーションは、鋼鉄の外皮を持つ風船のようなものだ。中の気圧が爆発的に高まれば、内側からの圧で簡単に破裂する。事前に聞いた通りの光景ではあったものの、地球連邦の威信、人類宇宙移民計画の象徴たる首相官邸が砕け散ったにしては、あまりに呆気なさすぎる光景だとサイアムは思った。数百人、千人以上かもしれない人間が真空に投げ出され、破片に引き裂かれ、死を実感する間もなく凍結した肉塊になったにしては。宇宙世紀への第一歩を血で汚

した、人類史初にして最悪の宇宙アロが実行されたにしては……。

（臨時ニュースをお伝えします。たつたいま、首相官邸（ラプラス）でなんらかの事故が起こった模様です。詳しい情報はまだ入っておりませんが、なにか重大な事故が……）

画面がテレビ局のスタジオに切り換わり、緊張も興奮も隠しきれないといったアナウンサーがモニターの中で喋っていた。誰もなにも言わず、しわぶきひとつ立てず、一同は肩を寄せ合うようにしてモニターに見入った。やがて、「親方」がひと言、「成功だ。これで家族に楽させてやれるぞ」と、めずらしく軽口めいたことを言ったが、その目は少しも笑っておらず、普段ならさかさず追従する腰巾着こしきんちやくのリーダー格も押し黙ったままだった。

（マーセナス首相を始め、構成各国の代表たちの安否は不明です……）と続くアナウンサーの声を聞きながら、サイアムはなぜか先刻の首相のスピーチを思い出していた。新しい世界に過去の宿業を持ち込むべきではない、他人の書いた筋書きに惑わされるな。当たり障りのないスピーチの中、異物のように差し挟まれたそれらの言葉が爆発し、頭の中ではね回るのを感じ続けた。

すべては我々が決めることだ、と首相は言った。その“我々”とは、サイアムたちのことではなかったか。自分たち“ハズレ”の人間にこそ、あの首相はなにか大事なことを伝えようとしていたのではなかったか。そんなことを考え、その首相も凍った肉塊になったと思いついたのは一瞬だった。次の一秒には、無事に地球に帰れるのか、報酬は間違いなく支払われるのかと現実的な不安が頭を占め、サイアムは一秒前の思考を忘れた。作業艇が二度目の加速準備に入り、艇内が慌ただしくなったせいもあった。

地球の低周回軌道に乗るには、秒速八キロの速度を維持しなければならず、これより遅いと重力に捕らわれて落下し、増速するとさらに高度が上がることになる。すでに一回目の加速をかけ、（ラプラス）の周回軌道より高度を上げている作業艇だが、完全に低軌道を脱するには秒速十キロの速度を得る必要があった。

低軌道を離脱後、地球より三万五千キロほど離れた静止衛星軌道に移行。そこを周回する工業衛星と接触し、作業艇を解体したあと、施設要員に紛れてばらばらに地球行きの連絡シャトルに乗り込む。それが“組織”の用意した離脱の手はずだった。

飛散した（ラプラス）の破片は加速が付き、本軌道より高い高度を周回し始めているので、ぐずぐずしていると作業艇とちか合う危険性がある。連邦軍の警備艇も全滅したわけではなく、周辺空域の封鎖を急いでいるに違いないとなれば、一刻も早く低軌道を離れなければならない。慣れない無重力で押し合いへし合いしつつ、サイアムたちはキャビンの粗末な椅子そまに体を固定した。宇宙に上がって三日、ムーンフェイス「無重力で体液分布が変化し、顔がむくむこと」が常態になった男たちの顔が壁沿いに並び、ほどなくレーザー・ロケットの燃焼が船体を振動させると、全員体がぐんと椅子に押しつけられた。

点火プラグの役割を高出力レーザーが果たすレーザー・ロケット・エンジンは、従来のロケットの三倍近い推力が得られる。秒速一キロ分の加速を二分かけて行う「安全運転」

とはいえ、無重力に慣れかけた身に1Gの重力加速度はきつい。サイアムは目を閉じ、椅子のひじ掛けをぎゅっと握りしめた。

加速はすぐに終わる。五時間後には静止衛星軌道に乗り、工業衛星と接触できるはずだ。そうしたら地球に帰れる日は目の前だ。母は、妹は、元気だろうか。前払い金でちゃんと病院に行けただろうか。国に戻ったら、あんなウサギ小屋みたいなアパートは引き払って、もつとマシなところに引っ越そう。どこかに小さな土地を買って、また羊の放牧を始めるのもいい。もう宇宙はたくさんだ。組織にも関わりたくない。この金で、おれはハズレじゃない人生を買い直すんだ――。

船体に不気味な衝撃が走ったのは、その時だった。

ガタン、と重いものが落ちたような音と、艇尾から伝播する不快な振動。エンジンの調子によるものではない、とすぐにわかった。宇宙にいれば、原因不明の音や軋みには慣れっこになるが、鋭く船体を叩いた音は尋常なものではなかった。全員がぎよつとキャピンの天井を見上げ、「宇宙塵か?」「ラプラスの破片が当たったんじゃないのか!？」と口々に叫ぶ中、「親方」はすかさず操舵室に繋がる船内電話を取り上げた。サイアムは、ほとんど表情を読み取れないその横顔を注視した。

「追いかけてきたんだ。〈ラプラス〉で死んだ連中が追っかけてきやがったんだ……!」

リーダー格の男が、常軌を逸した声を張り上げて頭を抱えた。サイアムは思わず肩を震わせたが、「黙れ!」と、「親方」が一喝する方が早かった。

「機関の近くになにかが当たったらしい。推力が落ちてる。『羊飼』、おまえ、外に行つて様子を見てこい」

操舵室との電話を置きつつ、「親方」はサイアムの目を見て言った。たまたま目が合ったからという、それだけの理由で指名されたに違いなかったが、だからと言って抗弁はできないいつもの口調だった。サイアムは無言で椅子の固定具を解き、エアロックの方に体を流した。

加速の止まった艇内は無重力になっていたが、リーダー格の男は重力があるかのように頭を垂れ、サイアムが気密室に入るまで顔を上げようとしなかった。

昔は船外作業に出るたびに体を減圧しなければならなかったらしいが、いまは宇宙服の性能が向上したお陰で、その面倒からは解放されている。ヘルメットをつけ、壁の支持具にかけられた生命維持装置を背負ったサイアムは、一分後にはエアロックの開放レバーに手をかけていた。

気密室の空気が抜けると同時に、いつさいの音は消え去り、ヘルメット内にこもる自分の呼吸音だけが聞こえるものすべてになる。エアロック脇のフックと命綱の接続を確かめてから、サイアムは作業艇の外に漂い出た。腰の携帯用スラスターを短く噴かし、艇の後部方向に体を流すようにする。

加速していないとはいえず、作業艇は宇宙の一点に静止しているわけではない。あと一息で低軌道を離脱できる速度、秒速九キロほどで地球の周囲を巡っているはずだ。半年前に訓練を受け始めた頃は、それでは船外に出た途端に振り落とされるのではないかと不安になったものだが、運動中の物体に乗る人間は運動の支配下にあり、なんらかの負荷や抵抗がかからない限り、これが止まることはない。たとえば空を飛ぶ飛行機から飛び出した時、落下するのは重力という負荷が体にかかるためだ。後方に弾き飛ばされるのは空気という抵抗があるためだ。その両方がない宇宙空間では、秒速九キロで移動する宇宙船の外に出た人間の体は、秒速九キロで移動し続ける。すなわち、体感的には、自分も宇宙船も完全に静止しているように感じられる。

作業艇の進行方向に対して逆向きに携帯用スラスターを噴かしたサイアムは、だから正確には艇尾に「向かった」のではなく、体にかかる慣性をほんのわずか減殺し、作業艇を先に「行かせた」ことになるのだが、やはり体感でわかることではない。艇尾にたどり着いたところで命綱を引き、作業艇との相対速度を合わせたサイアムは、シリンダー状の船体後部に突き出したスラスターノズルに点検の目を注いだ。

異常はすぐに見つかった。船体の外に張り出した燃料パイプに亀裂が入り、化学燃料が漏れ出している。小石ほどの隕石が当たったのか、いまやデブリとなった〈ラプラス〉の破片と接触したのか。漏れる端から凍結し、氷柱のようになった燃料を見、『追いかけてきた』と言ったリーダー格の声を思い出したサイアムは、少し鳥肌が立つ気分を味わった。

バカバカしい、デブリとの接触事故などごまんと例がある。訓練で得た俄か知識で悪寒をごまかし、サイアムは事の次第を艇内に伝えた。(バルブを止める。残った分で必要な加速は得られる。すぐに戻ってこい) というのが「親方」の返事だった。サイアムはパイプに付着した燃料の氷柱を折り、遠くに投げ飛ばした。放っておくと、なにかの拍子に氷柱が折れ、ノズルの方に漂い出す危険性がある。ノズルが噴射中の時に起こったら一瞬で大爆発だ。

サイアムは、命綱を手繰ってエアロックの方に戻った。太陽と地球を背にすると、それまで隠されていた星の光が見えることに気づかされた。大気の揺らぎを通さずに見るそれは、決して瞬かない銀色の光の絨毯だった。見える範囲に月はなく、人工物もなく、網膜に刺さるような鮮烈な星の光がどこまでも広がる。辛うじて肉視できる小さな星の先は、光の速さでも探りきれない闇の深淵――。

懐かしい。ふとそんな思いが脳裏を駆け抜け、自分の思考のあまりの脈絡のなさに当惑した刹那、常時オープンが無線がノイズとともに途切れた。同時に閃光が発し、作業艇のエアロックから炎が噴き出すのをサイアムは目撃した。

それは瞬く間もなく膨れ上がり、作業艇を呑み込んだ。衝撃波を浴びる直前、サイアムは操舵室の窓から操舵手の宇宙服が飛び出すのを見、灼熱した破片が四方に飛散するのを見、作業艇の船体が内側から砕け散るのを見た。次いでその体は爆発の衝撃で押し出さ

れ、不均等に働いた慣性が体を縦に回転させると、バイザーごしの視界は高速で流れる地球と星の光の奔流だった。

星、太陽、長大な弧を描く地球の輪郭。それらが目まぐるしく上下に流れ、ひと塊のガスと化した作業艇の痕跡こんせきがみるみる遠ざかってゆく。とにかく体の回転を止めることだ。目標になるものを見定め、宇宙服の無事を確認することだ。訓練で習った対処法が頭を行き過ぎたものの、衝撃で断線した神経はまともに作動せず、サイアムは無為むいに手足をばたつかせた。いったいなにが起こった。なぜ作業艇は爆発した。おれは、漏れた燃料の氷柱をちゃんと排除したのに。他に異常はなかったのに。

いや、違う。あれは内側からの爆発だった。艇内でなにかが起こったのだ。なにかが爆発して……なにが？ 燃料以外、危険物なんて積んでいなかった。積荷係の仲間がちゃんと確認しているから間違いない。誰かが故意に忍び込ませてもしない限り、爆発するような物が艇内にあるわけが――。

胃袋がきゅつと収縮し、サイアムは恐慌きょうわうの中で目を見開いた。裏切り、爆弾、口封じ。複数の言葉が視界と一緒にぐるぐる廻りまわ、なんらかの論理を組み立てかけたようだったが、それも恐怖と混乱の荒波に押し流され、最後に浮かび上がったのは『追いかけてきた』というリーダー格の常軌を逸した声だった。

〈ラプラス〉の亡者どもが。ほんの数分前まで生き、いまは千の凍った肉塊になっている亡者どもが、執念深く作業艇を追いかけてきた。そして鋭い牙を剥いて襲いかかり、自分たちを殺した者に当然の報いを受けさせたのだ。艇内にいた“親方”たちには速やかな死を。たまたま船外にいたサイアムには、真綿で首を絞めるような緩慢かんまんな死を。

ちぎれた命綱が目の前を流れる。その向こうを作業艇の破片が追い抜いてゆく。生命維持装置の最大稼働時間は八時間。付近にいる船に救難信号が受信されたとしても、それまでに回収される可能性は限りなくゼロに近い。なにしろこちらは音速を超える速度で流されているのだ。行く先は地球か、宇宙の深淵か。作業艇は低軌道脱出速度に達していないから、たぶん地球の方だろう。体の慣性速度と地球の重力の折り合いがつけば、低軌道に捕らわれてミイラになるまで地球を周回し続ける。折り合いがつかない場合は地球に真っ逆様、大気圏に炙られて流れ星が一丁上がりだ。

いや、その前に〈ラプラス〉の破片群に突っ込み、秒速八キロの鉄片に切り裂かれてもするか。奇妙に冷えた頭の片隅で予測する一方、毛穴という毛穴から噴き出す恐怖が宇宙服の中を満たし続け、死にたくないと言いつつサイアムは絶叫した。死にたくない、こんな死に方は嫌だ。最期までハズレの人生なんてあんまりじゃないか。

帰らなくちゃいけないんだ。母さんと妹のシャーラはおれを待っているんだ。死にたくない死にたくない死にたくない――。過呼吸を知らせる警告ブザーが鳴り響く中、きつく目を閉じて念じ続けたサイアムは、次に目を開いた瞬間、それを見た。

灼熱の尾を引いて流れる作業艇の破片の向こう、見たこともない宇宙服を着た人影がひ

とつ、二つと現れ、背中のスラスタを噴かしてこちらに近づいてくる。それはみるみる大きくなり、ヘルメットと思しき頭部に赤い光を点すと、手に携えた機関銃らしきものの銃口をサイアムに向けた。

思わず両手を前に突き出したサイアムを意に介さず、大昔の甲冑に似たデザインの宇宙服が急速に近づく。肩に取りつけられた盾、濃緑色のボディ、頭部でざらりと光る二つ目。宇宙服ではない、それ以前に人間ですらないなにかが傍らを次々にすり抜け、その巨体を――信じられないことに、身長二十メートルはあるう巨体を――サイアムに見せつけて行き過ぎる。サイアムはその暴威に巻き込まれ、ゴミのように回転し、一つ目の巨人たちが目指す先を視界に入れた。そこにあるのは、青く輝く地球の輪郭と、無数の爆発の光輪に彩られたバカでかいボンベの化け物だった。

ボンベとしか見えない巨大な円筒に、羽根のように見える三枚のミラー・ブロックが取りつけられた物体は、テレビで見たことがあった。宇宙移民計画の柱、「島3号」型のスペースコロニーだ。いま、その長方形の羽根は三枚ともひしゃげ、ボンベの表面には醜い焦げ跡がいくつもついていて、まるでスクラップというありさまを呈していた。人類史上最大の建造物、テレビごしにも壮麗だったびかびかのスペースコロニーが、膨大な質量を震わせて地球の輪郭に触れつつあった。

手にした機関銃を撃ち散らし、一つ目の巨人たちがそれに伴走する。抵抗する宇宙船や戦闘機を次々と葬り、コロニーの周辺を乱舞する巨人たちは、さながら悪鬼の群れだった。その間にもスペースコロニーは前進を続け、低軌道を割って地球に近づいてゆく。全長三十キロ、直径六キロを超えるコロニーの先端が大気圏に触れ、灼熱しながらずぶずぶと大気層に沈み始める。コロニーを誘導し、地上に落下させようとしている巨人たちの思惟を察したサイアムは、やめろ！と夢中で叫んでいた。

そんなものを落としたら地球は目茶苦茶になる。母さんがいるんだ。シャアラがいるんだ。やめろ、やめてくれー！

巨人たちは答えず、灼熱するコロニーの反射光がその巨体を赤く浮かび上がらせる。ミラー・ブロックがもぎ取れ、炎に包まれたコロニーの円筒が、雲の筋を蒸散させながら水の星に沈んでゆく。最後の審判だ、とサイアムは思った。悪業に満ちた世界を終わらせ、善行を積んだ者だけを天界に導く神の裁き……なら、これは仕方がないことなのか？ そんな諦念は、“すべては我々が決めること”と告げた誰かの声に吹き散らされ、サイアムは閉じた目を開いた。

大気のパールを灰茶色の噴煙で汚し、巨大隕石と化したスペースコロニーが地表に到着する。地球の輪郭の一端に閃光が発し、夜明けの太陽に似た光が拡大してゆく。サイアムは泣いていた。己の無力への怒り、悔恨、悲哀、整理できないさまざまな感情が爆発し、沸騰した体液になって目から噴きこぼれるのを感じ続けた。やがて光は拡大し、太陽より強い光になって網膜を焼き――出し抜けに静寂が無い降りた。

ゆっくり、目を開けてみる。体の回転は止まっていた。生命維持装置の警告ブザーも途絶え、呼吸や脈拍が危険域から正常値に戻りつつあることを伝えていた。バイザー越しに見える地球の輪郭は、静止しているように見えた。落下するスペースコロニーはどこにもなく、無論、一つ目の巨人たちも見当たらなかった。

眼窩がんかからこぼれた雫がひとつ、ヘルメットの中を漂い、除去装置に吸引されてすぐに見えなくなる。夢……か？ 気絶していたという実感はなく、サイアムはしばらく当惑の間を漂った。あまりにも非現実的な、しかし奇妙に生々しい実感を伴った悪夢。自分の脳髓のうずいにあんな幻を構成する力があるとは思えず、夢の余韻よゐんを引きずった目で周囲を見回すと、無数のデブリがあたりを取り囲んでいることに気づかされた。

引きちぎれた外板、構造材、砕けたガラス。中には十メートルを超える残骸もあるデブリ群は、〈ラプラス〉のものと知れた。飛散した際に本軌道から離れ、より高い高度を周回するようになったデブリと、爆発で吹き飛ばされたサイアムの相対速度がたまたま一致したのだろう。

周囲のデブリはゆったり流れており、ほとんど止まっているように感じられた。自ら作り出した真空の廃墟に囲まれ、永遠に低軌道を周回する宇宙服がひとつ……。ぼんやりと考え、ひどく静まり返っている胸の内に当惑を新たにしたサイアムは、デブリの中にきらりと輝くなにかを見つけた。

最初は、ミラー・ブロックから砕け散った凹面鏡の破片かと思った。地球光を反射してきらめく物体は、それほどにまぶしかった。サイアムは、あと十秒分の噴射が保証されている携帯用スラスターを噴かし、光る物体の方に近づいていった。

不思議なくらい、死の恐怖はなかった。それよりも強い、なにかしら予感めいたものが胸の奥で脈動していた。広大無辺な宇宙で、けし粒以下の物体同士がたまさか相対速度を合わせ、接触をする。億分の一以下の偶然を前にして、自分の正気を疑う神経も麻痺していたのかもしれない。

ゆるゆると回転しながら、その物体は滑らかな表面に地球光を映していた。サイアムは携帯用スラスターを小刻みに噴かし、物体の前に体を静止させた。

亀裂を生じさせながらも、物体は差し渡し三メートル強、厚み三十センチほどの六角形を保っていた。サイアムは、磨き抜かれたその表面に自らの宇宙服を映えさせ、手袋に覆われた手をそっと近づけてみた。

物体に映る宇宙服が、同じように手をのばす。向き合った両者の指先が静かに触れ合い

のぼした手のひらが空をつかむ虚しさに、サイアム・ビストは目を覚ました。物体はない。そこに映える宇宙服姿の自分もない。ベッドから見上げる天井に、瞬かない星空が広がっているのが見えた。無論、本物の光景ではない。ドーム構造の部屋の壁面全体に映し出された、映像の宇宙。肉眼で捉えるのと区別がつかない、精緻な全天候モニターの星空だ。

そして、その虚構の宇宙に虚しく五指を広げ、空をつかんだ皺くちやの手のひらがひとつ——。若き日の夢は過ぎ去り、老いて萎びた手のひらを眼前に眺めたサイアムは、少しまどろんでいた自分を覚え、ひっそり安堵の息を漏らした。冷凍睡眠から醒めたわけではない。もしそうなら、今頃は全身が賦活の苦痛を訴え、凍えきった細胞に体液がめぐる疼痛に身悶えしているはずだから……。

ふと、人の気配を感じた。ベッドひとつの他は星しか見えない、床と壁の境目も判然としない空間に、ひとりの男が黙然と立ち尽くしていた。この部屋に入れる人間の数は多くない。「カーディアスカ」とサイアムは問うた。微かに揺れた空気を返事にして、カーディアス・ビストの長身が宇宙の闇から滲み出し、ベッドの方に歩み寄ってくる気配が感じられた。

詰襟のシャツに、同じく襟の立ったマオカラー風のスーツ。ビスト財団伝来の衣装を隙なく着こなし、銀色の眉の下に鋭い眼光を閃かせるカーディアスは、齢六十を過ぎていまだ肉体の衰えを感じさせない。身に染みついた権力の臭いを隠しもひけらかしもせず、羨望も中傷も存在の重みでねじ伏せる剛直な立ち姿は、いまどこから見てもビスト財団当主のそれだとサイアムは思った。

金融・鉄鋼・製造といった基幹産業は無論のこと、流通からレジャー産業、果ては百貨店経営にまで及ぶビスト一族の力を一身に体現し、複雑怪奇な人脈と投資機関の網を支配せむとつで動かしながら、決して表には現れない隠花植物の王。跡目を継いで十数年、「財団」と言えばビスト財団を指す地下水脈の臭気に慣れ、連邦政府との爛れた共生関係にも慣れて、ますます強かになった身内の顔ではあった。

サイアムは多くの子を儲け、そのほとんどがビスト財閥と呼ぶべき影の王国を形成しているが、次男の長子であるカーディアス以外、王座を譲るに値する人材には恵まれなかった。初代が事業を起こし、二代目が拡大し、三代目が遊び惚けるのが世の常とはいえ、カーディアスの場合、若い頃の放蕩が人の幅を広げ、ビスト家の毒を薄めるように働いた節がある。どだい、学生時代に家を飛び出し、素姓を隠して連邦宇宙軍に入隊、一時は戦闘機を乗り回していたというその経歴は、権力の毒が廻りきった一族においては異端中の異端だ。跡目候補の筆頭であった父親に似ず、根が闊達にできているカーディアスには、段抜かしの襲名をやっかむ同族たちを風と受け流す強さも備わっていた。

もつとも、破天荒な異端児の顔は表向きのものでしかなく、実は誰よりも繊細に人の機微を読み取り、それを含んだ上で剛直に振る舞う複雑さがカーディアスにはある。父親の不可解な死の真相を含め、すべてを知った上で二代目当主を継いだ男の腹の中にはなにが詰まっているのか。隠居して久しいサイアムにはすでに測りかねる時さえあったが、こうして定期的に顔を出しては隠微な目の色を見せつけ、益体なく眠りこける年寄りに過去の不実を思い出させる、それがカーディアスという男だった。そして、傍系も含めれば二百家族は下らないビスト一族の長にありながら、この孫ひとりの他に不実を分けあう同志を持たなかったのがサイアムの現実ということでもあった。

いまもベッドに横たわるサイアムを見下ろし、「お加減は？」などと訊くカーディアスの瞳には、宗主と二代目当主というだけでは説明のつかない、押し殺した感情の澱が潜んでいる。サイアムは、ビスト家の紋章が彫られたブレスレット型のリモコンに触れ、音もなくせり上がってきたサイドテーブルから水差しを手にした。

「冷凍睡眠が若返りを促進するという仮説は、わたしの体では否定されたな。差し引きゼロというところだ。疲れたよ」

冷たい水が渴いた体に浸透するのを感じながら、ため息混じりに応じる。肉体を凍結させ、代謝を停止させる冷凍睡眠は、宇宙世紀にあつても完成の域に達したとは言いがたい技術だ。まだ一部の研究機関や病院でしか扱っておらず、被験者は半ばモルモット扱いというのが実情だが、どうにか実用段階のレベルになったと聞いた時点で、サイアムはそれを研究機関ごと買い取っていた。

バカンスや休養と称しては、財団当主の激務の合間にこつこつと時間を貯め、引退後の長期睡眠と合わせて二十年ほど稼いだか。主治医の診断によると、現在のサイアムの肉体系年齢は九十三歳に相当するとの話だった。連れ合いはとうの昔に先立ち、子供らも半分近くが他界した中、自分ひとりが老いぼれた肉体に鞭打ち、自然の理に逆らつて時を渡り続けている。そのさまは拷問という以上に滑稽であり、生に執着する老人の無残を体現するものでしかなかったが、サイアムには、嘲笑われてもそうしなければならぬ事情があった。ビスト一族の繁栄のため、繁栄の底に横たわる呪いを封印するため、不実を承知で時を渡る必要があった。

百年の昔に、この世界に仕掛けられた呪い。『プラスの箱』の守人として――。

「どうだ？」

それも、じきに終わる時が来る。そのために動いているカーディアスに、サイアムは事務的な声をかけた。「予定通り、三日後に実施します」と、同じくらい事務的な声が返ってきた。

「わたしが直接（インダストリアル7）に出向き、引き受け先と接触する手はずです」

「おまえがか」

「他人に任せられる仕事ではありませんから」

カーディアスは薄く笑い、言った。笑うと、パイロットだった頃の不敵な本性が目に見えくようだった。老境に達していても、まだ己の肉体を信じられるのが彼の年頃だ。起き上がるのもままならないサイアムには、その頃の感覚さえ思い出せるものではない。

「せっかく『UC計画』を転用できたのです。引き受け先にくれてやる前に、少しいじつておきたいという気分もあります」

「元パイロットの好奇心か……」

「欲と言ってくださいませんか。実際、いい機体ですよ。あれは」

ビスト財団の当主ともある者が、自らテストパイロットを買って出かねないカーディアスの口調だった。それもいい、とサイアムは苦笑する。引き受け先の選定からその方法に至るまで、『箱』を第三者に譲渡する計画はカーディアスに任せてある。譲渡の条件として、サイアムが提示した無理難題をクリアするべく、それとはまったく別の計画を転用することを思いついたのもカーディアス自身だ。多少は趣味も交えての思いつきなのだろうが、仕掛けが万全であるならやらせておくしかなかった。

『UC計画』の所産、《ユニコーン》。可能性の獣に、『ラプラスの箱』への道案内をさせるか……」

独りごちてみて、寓意ぐういがすぎるとあらためて思う。しかし、物事が大きく動く時はそんなものだという思いもサイアムにはあった。すべてが最初から計画されていたなどということはなく、あとになって偶然の符合に震撼とさせられる。そう、しよせん人の生は、すべて偶然に支配されているのだ。

あの時、十七歳のサイアムが作業艇の外に出たことも。無辺の虚空をさまよい、《ラプラス》の破片群に遭遇したことも。そこで『箱』を手に入れたことも……。

物思いに取りつかれたこちらの横顔うかがを窺い、カーディアスが神妙な目を向けてくる。サイアムは天井を埋め尽くす星空を見上げたまま、「引き受け先の信用調査は、万全だろうか？」と取り繕つくろう言葉を並べた。

「アナハイム・エレクトロニクスと取引の実績があります。海賊事件を装ったの裏取引ですが、それを手始めに窓口は開けています。現状では唯一の選択肢かと」

ビスト財団が経営に参与する企業の中でも、最大手と言って間違いのない企業名をカーディアスは口にした。その名の通り、地球は北米地区に端を発した家電メーカーは、いまや地球連邦軍の装備受注率トップを占め、地球圏最大の企業グループを形成している。一介の家電メーカーが軍需産業の雄に成り上がる発展の歩みは、そのままビスト財団の歩みに重なるものでもあった。

そのアナハイム社と取引の実績があるなら、そこにはビスト財団の関与もあると見ていい。引き受け先の身元を保証するなよりの根拠と言えたが、カーディアスはどこか歯切れの悪い口調だった。与よする企業に血族を送り込み、影の王国の基盤を充実させながら、時に暴走する彼らの手綱をしっかりと握っておかなければならない。王座に座る者の孤独を

思い出しつつ、「アルベルトか」とサイアムは問うた。カーディアスは目を逸らし、「ええ。細かい金儲けは得意な男です」と短く応えた。

「どのみち、不確実性に頼るしかないのがこの計画です。いかに目配りをしようと、すべてが万全というわけにはいきません」

わずかに覗かせた動揺を押し隠し、カーディアスは硬い声で続けた。隠しても滲み出す振り幅の激しさも、いまだ残る若さの証明というところか。もはやそよ風ひとつ立たない我が身の枯れように辟易としながら、サイアムは無言を返した。

『「プラスの箱」の秘匿』とともに、ビスト財団の栄華はあった。連邦との間に築かれた百年の盟約を反故にしようというのです。秘密保持は徹底しているつもりですが、感づいている者はいらっしゃいます。財団のみならず、アナハイムにも不穏な動きはあります」

「メラニーが実務を離れてから、あの会社も腑抜けた。そろそろ財団抜きの経営を覚えてもいい頃だ」

「彼らにとっては死活問題です。マーサも黙っていないでしょう。権力の濫用ですよ、我々がやろうとしていることは」

究極の権力は、人を殺すと知っている男の目と声だった。その目を見返し、いまは亡き次男の面影を重ね合わせたサイアムは、「気にするな」と自分とカーディアスの両方に言った。

「無能者は、能力のある者に負わされた義務と責任の重みを想像することはない。死ぬまでな」

頭上に映える遠い星を見据え、サイアムは口を閉じた。しばらくの沈黙を挟み、「変わりませんが、宗主は」と返ってきたカーディアスの声は、苦笑混じりの柔らかさだった。身内の体温を伝える声音に、むしろ息苦しさが増すのを感じながら、そうだろうかどサイアムは自問してみた。

変わらない？ いや、変わった。夢の中にいた十七歳の若者は、世の辛酸をなめつくしたつもりでいた無知な少年は、ベッドに縛り付けられた老人を自分とは認識できないだろう。百年に近い歳月は、人を変えるのに十分な時間だ。ある目的のために立ち上げられたシステムが、いつしか当初の志を見失い、ただ継続するためだけに際限なく肥大太ってゆく。人や組織の不実を発酵させるのに、百年という時間はおつりの来る長さだ。地球連邦政府しかり。ビスト財団しかり。アナハイム・エレクトロニクスしかり。そして、自分という人間しかり――。

あのあと、付近を航行する民間船に奇跡的に救出されたサイアムは、『箱』とともに地球に帰還した。故郷には戻らず、母と妹にも二度と会わなかった。無知で貧しいテロリストの若者は、分離主義者の仲間とともに宇宙の藻屑になったのだ。自分の生存が漏れ伝わり、何者かが書いた筋書きを乱すような結果になれば、せつかく拾った命はもろろん、母と妹の身も危険にさらすことになる。そう予測できる程度には、当時のサイアムも世の中を知

っていた。

その何者かが書いた筋書きによるものか、首相官邸爆破テロに携わった者たちは速やかに検挙された。“組織”は、それを支援していた分離主義国家ともども、連邦軍に根こそぎ壊滅させられた。連邦政府はすぐに新政権を発足させ、『リメンバー・ラプラス』というかけ声のもと、反政府運動の徹底的な取り締まりを開始した。テロを計画・実行した組織の背後には、リベラルなマーセナス政権の転覆を狙う連邦議会極右派の策動があった——事の真相に触れる本や映画がいくつか世に問われたが、大方の世論はありきたりの陰謀説と片付け、連邦の苛烈かれつとも言える対テロ政策に賛同した。

大衆が愚かだったのではない。すでに始まってしまった宇宙世紀を前に、やれ棄民政策だ、やれ民族闘争だと、十年一日の主張しかできない分離主義者たちこそ愚かだったし、実体のない理念より現実の生活を選ぶという意味では、大衆は常に利口であるという歴史のメカニズムが実証されたのに過ぎなかった。宇宙世紀0022、連邦政府が「地球上の紛争のすべての消滅」を宣言するまで続いた闘争は、結果的に地球連邦の国家的基盤を確立し、宇宙世紀に移行した社会のパラダイム・シフトを推し進めたとも言える。リカルド・マーセナス首相が訴えた「神の世紀との訣別けつべつ」は、皮肉にもその死によって達成されることになったのだった。

その間、「すでに存在しない人間」になっていたサイアムは、その特性を活かして事業を起こした。宇宙世紀に入っても、マフィアやヤクザといった呼称に表される地下社会は健在であり、それらが表社会の政治や経済活動に関与する構造も西暦の時代と変わりがなかった。サイアムはその中で頭角を現し、特許事業をめぐる揉め事ももに介入したのをきっかけに、北米地区に本社を置くある企業と関係を持つようになった。

アナハイム・エレクトロニクスと呼ばれるその企業は、当時は中規模の家電メーカーに過ぎなかったが、サイアムの働きで件の特許を取得すると、それをバネに急成長し始めた。サイアムの持つ『箱』の力が政府を動かし、特許を争っていたライバル企業を干上がらせた結果だった。地下社会との繋がりを保つ一方、サイアムはアナハイム社の役員に迎え入れられ、専務であった男の娘と結婚した。旧フランス貴族の流れを汲む由緒正しい家柄は、「すでに存在しない人間」が再び表社会に出るための装置として有効だったし、素姓の定かでない入り婿であっても、才能があれば問題はないとする気風が当時のビスト家にはあった。サイアムは、アナハイム社の傘下で事業を起こす傍ら、ビスト家の名前を使って公益法人を立ち上げた。美術品や骨董品こつどうなどの世界遺産を、地球より安定したコロニー環境に移送する財団法人組織だったが、実際には事業や投資で儲けた金を洗浄する集金窓口であり、連邦政府の官僚を飼って殺す天下り先としても機能した。現在まで続く連邦との共生関係、今日のビスト財団は、その瞬間に産声うちはこえをあげた。

盤石な連邦政府の体制のもと、宇宙移民計画は順調にスケジュールを消化していった。L5におけるサイド1の完成を待たず、L4でサイド2の建設が始まると、スペースコロ

ニーの建造は加速度的に進展するようになった。「島3号」型コロニーの数はたちまち百を超え、その意思を顧みられることなく、億単位の人々が休みなく宇宙に打ち上げられた。いつしか宇宙移民者と地球居住者の数は逆転し、牧畜も農業もコロニーで行われるようになる。経済も生産も宇宙なしでは成り立たない時代が到来した。地球への出入りには厳しい規制が設けられ、スペースノイドが再び大地を踏みしめる機会は無と云ってよく、彼らの間にはエレズムと呼ばれる思想が定着した。地球を聖地と見なし、人類発祥の場として永遠に遺すべきとするその思想は、地球への未練を断ち切ろうとするスペースノイドの哀歌であり、いまだ地球に残る特権階級に手向けた意趣返しでもあった。

実際、連邦政府が推進する宇宙移民計画は、第一段階の計画が達成された0050頃から歪みを出し始めていた。本来、環境回復に必要な最低限の人員だけが残るとされた地球に、いまだ多くの人々が居残り、新たな土地開発まで行われるようになっていたのだ。連邦政府自体も地球に拠点を築いて動こうとせず、その関係者だけが地球に留まり、中央政府の片務的な立法で縛られたコロニー群が声も出せずに地球の周囲を廻り続ける、という構図。連邦政府は『ラプラスの悲劇』を持ち出し、宇宙に政府を移転させることの危険を説いたが、その一方で新規コロニーの建造計画を凍結させる支離滅裂は、「所定の数の人間を棄て終わった」と暗に認めたも同然だった。当然、スペースノイドの不満は高まり、その不満を凝集したかのように、ひとつの思想が宇宙の片隅で誕生した。

提唱者である政治思想家、ジョン・ズム・ダイクンの名に因み、その思想のちにジオニズムと呼びならわされるようになった。スペースノイドの自治権要求運動をコントリズムに編纂し、エレズムを加えて体系化したジオニズムは、人類の進化にまで言及した壮大な思想であり、歪んだ宇宙移民計画の結果を生きるスペースノイドに自意識の喚起を促すものだった。連邦政府はこれを黙殺したが、ジオニズムは月の裏側と向き合うサイド3を中心に広まり、ついにはサイド3に事実上の独立を宣言させるに至った。

宇宙移民が開始されて半世紀、スペースノイドにとって輝かしい革命になるはずだった独立宣言は、しかし連邦政府にとっては分離主義運動の終焉以来、初めて迎える実質的な脅威となった。連邦政府はサイド3への弾圧を強化し、宇宙軍の増強を開始した。《ラプラス》を取り囲んでいた警備艇とは武装も大きさも比較にならない、最新型の宇宙巡洋艦《サラミス》が何隻も触先を並べ、対してサイド3側も国防隊の軍備を厚くして来るべき有事に備えた。そして双方の緊張が臨界点に達した宇宙世紀0079、たび重なる経済制裁と暴力的な内政干渉への回答として、ジオン公国を名乗るサイド3は地球連邦政府に宣戦を布告。双方ともに総力戦となる戦争の火蓋が切つて落とされた。

ほぼ一年間にわたって繰り広げられたことから、一年戦争とも呼ばれる連邦とジオンの戦いは、宇宙世紀のテクノロジを惜しみなく投入する殲滅戦となり、人類に史上最悪の戦禍をもたらした。総人口の半数を死に至らしめたとも言われる災厄の一年の後、ジオン公国の敗北をもって終戦協定が結ばれ、地球連邦政府は辛うじて支配体制を維持した。し

かしジオニズムに端を発した地球と宇宙の階級闘争は終わらず、その後も十年以上の長きにわたっていくつもの戦乱を引き起こし、一年戦争の傷が癒えない地球圏に塩を擦り込み続けてきたのだった。

その途方もない消耗と浪費は、アナハイム・エレクトロニクスに恒常的な戦争特需をもたらし、地球圏最大の企業グループに押し上げる糧となった。旧ジオン公国の軍需産業を吸収合併し、地球連邦軍の装備開発をほとんど一手に賄う傍ら、工場ごとの独立採算制を言い訳にして反地球連邦組織とも通じ、地球と宇宙の双方を相手に公平な商いを持ちかける。月に資本の大部分を移していることから、「月の専制君主たち」、もつと直截的には「死の商人」と揶揄されるアナハイム・エレクトロニクスの背景には、しかし常にビスト財団の影があり、その寡占的かつ排他的な企業運営を保証する『箱』の存在があった。

連邦政府から無限の便宜を引き出す『箱』。百年にわたってビスト財団が隠匿してきた『箱』。宇宙世紀の始まりの日、億分の一の偶然でサイアムが手にした『箱』……。重力、宗教、民族の軛を脱した人類が、宇宙世紀に手に入れるはずだった新たな契約の箱『プラスの箱』。それは百年の呪いを封じ込め、いま現在も自分とともに在る。乾ききった無力な体をベッドに沈めたまま、サイアムは深い吐息を漏らした。

これまでも、『箱』を開ける機会があった。その瞬間に世界を根底から覆し、“あるべき未来”を宇宙世紀にもたらす機会があった。そのために、自分はビスト財団を育て上げ、冷凍睡眠に頼ってでも生き長らえてきたのだ。ひとりの人間には重すぎる義務と責任を背負い……いや、言い訳はするまい。自分には、その蓋を開ける勇氣と力がなかったというだけのことだ。あの時に見た幻——巨大なスペースコロニーが地球に落下する地獄絵図に怯えながら、それが現実と化す無残を座視し、財団の維持繁栄にのみ心血を注いできた。百年を経て当初の志を見失い、人を信じることもできなくなった臆病者が、未練たらしく生き長らえてきたというだけのことだ。

地球は、いまは夜の顔をこちらに向け、壁の一面に薄い大気のベールを浮かび上がらせていた。百年前から変わらぬ地球……だが実際には、数度の「コロニー落とし」で大量の塵芥がまき散らされ、大気層に汚れた霞の帯が滞留している地球。大気のベールに目を凝らし、千年は消えないだろう罪の刻印を網膜に焼きつけようとしたサイアムは、その地球の前を横切る人型の物体に目を留めた。

小指の先ほどの大きさにしか見えなかったが、かなりの高速で星の海を横切った人型は、宇宙服を着た人間の類いではなかった。モビルスーツだ。レーダーなどの電子機器を無力化するミノフスキー粒子の発見に伴い、接近戦が主流となった宇宙時代の戦場で用いられる人型機動兵器。幻に見た一つ目の巨人は、いまやありふれた兵器となってアナハイム社の生産ラインに乗り、戦車や戦闘機に代わる主力装備の座を地球連邦軍の中に占めていた。

先んじて開発に成功したのはジオン公国で、その存在は開戦劈頭、国力において圧倒的に劣るジオン軍に優勢をもたらしたものが、一年戦争の記憶が薄れかけている現在、そ

んな故事は歴史書の片隅に記される事項でしかない。数年後、いまはジオン共和国と呼ばれるサイド3が自治権を放棄し、連邦政府に帰順すれば、人々はジオンという名前そのものを忘れ去るだろう。スペースノイドの自治権要求運動も、階級闘争の熱も、ジオニズムの衰退とともに行き場をなくし、この暗く冷たい宇宙に放散してゆくのだろう。

時に、宇宙世紀0096——革命の熱が過ぎ去り、諦念の風が吹く宇宙は、星の光も冷たい。

「……『ラプラスの箱』を開ける時が来たのだ」

その冷たさを心身に受け止め、サイアムは口を開いた。「このままスペースノイド独立の気運が失われれば、地球圏は逼塞する」

「ですが、それはこれまで以上の混乱を世界にもたらすかもしれません」

カーディアスが冷静な声を差し挟む。虚空の只中にあるベッドの傍らに立ち、その長身は死の床に立ち会う牧師にも、死神のようにも見えた。サイアムは微かに口もとを緩め、

「永遠の停滞の中で、緩やかに死んでいくよりはいい。『ラプラスの箱』を、それを託すに足りる者に手渡すことができたなら、守人たるわたしの役目も終わる……。子や孫が老いてゆくさまを見る不自然は、そろそろ終わりにしたい」

それを託すに足りる者。口にしてみて、自分はそうではなかったとサイアムは再確認する。自分にも、このビスト財団にも、待つ役割しか与えられていなかった。『箱』の魔力の恩恵に与かり、世界を動かすほどの力を手にしながら、『箱』を託すに足りる者を待ち続けた中継役。文字通り、ただの守人に過ぎなかった。

あれからほぼ一世紀を経て、その者が生まれ出る兆候は見え始めている。宇宙という新しい環境を得て、人は現在を超える力を手にしつつある。百年前、あの〈ラプラス〉に集った人々が予測したよりも、ずっと早く。我々の中に眠る内なる神……可能性という名の神の祝福を受けた者たちが、数百ものスペースコロニーの中で胎動している。

その者——ニュータイプ。ジオニズムに語られた人の新しいかたち。彼らになら、きつと『箱』は開けられる。可能性の獣たる《ユニコーン》にまたがり、『箱』の中身をよりよく人に示すこともできよう。あの〈ラプラス〉で紡がれた贖罪の祈りをいまに繋げ、宇宙世紀の歪みを正しくもくれるだろう。

無論、確証はない。甚だ乱暴なやり方であることも承知している。しかし、もはや時はないのだ。手遅れになる前に行動を起こさねばならない。世界が完全に逼塞する前に。可能性という名の神が死に絶える前に。次の冷凍睡眠には耐えられないだろうこの体が朽ち果てる前に……。

「わたしを、赦すか？」

しよせんは、己の独善。一方で自覚する重い不実を押しひしがれ、サイアムは最後にそう言った。

「これで、ひとつの世界が終わるかもしれないのです。わたし以外、誰があなたを赦せる

「というのです？」

カーディアスの返答は明瞭だった。不実も、苦痛も、その一瞬に色を失い、ただ身内という確かな実感が骨身を熱くするのを覚えたサイアムは、応える言葉もなく壁面の地球に目のやり場を求めた。

赦すと言うか、このわたしを。ビスト一族に課せられた百年の沈黙を守るために、我が子さえ手にかけて鬼畜を。おまえの父親を奪った人でなしの祖父を。独善かもしれない想いに従い、この世界そのものを混沌に導こうとしている男を――。

地球は、夜明けの最中にあつた。長大な弧を描く輪郭の一端に太陽の光が生まれ、白い閃光が大気の筋を浮かび上がらせると、夜の中に沈んでいた青が鮮やかによみがえってゆく。

その光はサイアムが横たわるベッドを照らし、カーディアスを照らし、折り重なったひと塊の影を床に押し拡げた。室内にわだかまる不実さえ焼き尽くすような強い光、微かに滲んで見える光を浴びながら、サイアムは再び眠りに落ちた。

《つづく》